連載「大友時代を生きた人々」

国際文化学部鹿毛敏夫教授の「毛利元就～旧大内領国を併合し大大名へ～」が掲載

●大分合同新聞朝刊　2021年12月25日(土)

大友時代を生きた人々

鹿毛　敏夫

毛利元就
旧大内領国を併合し大大名へ

毛利元就は、明応6（1497）年に生まれ元亀2（1571）年に没した、安芸国（広島県）の戦国武将です。

吉田郡山城（広島県安芸高田市）を拠点に、一国人領主から中国地方6カ国を統治する戦国大名へと成長することになる元就ですが、その飛躍の契機となったのは、隣国周防（山口県）を本拠として西日本最大の版図を誇っていた大内義隆を巡るクーデターの勃発でした。

当主義隆との対立を深めた重臣陶隆房は、隣国安芸の毛利元就や豊後の大友義鎮（宗麟）らに入念な根回しをした上で、天文20（1551）年8月末に挙兵します。大内家家臣団の多くが隆房らにくみする中、最期を悟った義隆は、ついに9月1日、長門国（山口県）の大寧寺で自害しました。

家臣が主君を倒す典型的な「下剋上」が遂行された直後の9月19日、臼杵鑑続、吉岡長増ら大友義鎮の重臣が、「毛利右馬頭」こと元就に宛てた連署書状が残されています。そこに記されている文言は、「陶隆房御入魂の首尾をもって、御音問祝着の段、直書をもって申され候、向後においては、別して申し談ぜらるべきの条、珍重に候」。

隆房が元就との協力の上で実行したクーデターの知らせを受けた義鎮は、その成功を喜び、直々に元就へ書状をしたためた、とあります。そして、大内義隆を倒した後の政治については、陶・毛利・大友で相談しながら進めていくべきことを伝えています。

毛利元就と大友義鎮というと、中国地方と九州の間の関門海峡を挟んで常に敵対関係にあったように思われがちですが、陶隆房による反大内義隆の軍事行動の際には、3者連携する関係にあったことが分かります。

実際にこの後、義隆後継としての大内家家督には、大友義鎮の弟晴英が入ります。天文21（52）年3月、大内氏の祖琳聖太子伝説の故事に倣って海路で大内館入りした晴英は、室町幕府将軍足利義藤（義輝）から「義」の一字を拝領して「大内義長」と改名し、領国の統治に意欲的に取り組んでいきました。

しかしながらその後、毛利元就と陶隆房の対立が表面化し、元就は、瀬戸内海の村上水軍を味方に引き入れて、安芸の厳島の戦いで隆房らを滅ぼします。さらに、周防に進攻した毛利軍は大内義長を攻め囲み、窮した義長は弘治3（57）年4月、長門の長福寺（功山寺）で自刃しました。以後、毛利氏は旧大内領国を併合して、一躍大大名へと飛躍するのです。

（名古屋学院大学国際文化学部教授）

陶・毛利・大友の結託を証する「大友氏年寄連署書状」（下関市立歴史博物館蔵）